

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】

vol.
38
2018 WINTER



筑波大学
University of Tsukuba



大石膏室



04 「聴」矢澤真人 教授

08 「TSUKUBA OBOG」田中誠司 氏

10 「附属学校めぐり」筑波大学附属桐が丘特別支援学校「桐が丘祭：小学部 学習発表会」

12 「躍動 筑波大生」宮地秀享さん／高藤真依さん、佐藤悠樹さん

14 「Homeland」ジャムフル・ジヨフジャエフさん

16 TOPICS | 23 世界のトピラ | 24 リレーメッセージ

文脈を理解す

ひとりひとりの能力とニーズ





INTERVIEW

る国語辞書

に応える言語支援ツールへ

人文社会系
矢澤真人
教授

Makoto Yazawa

言葉の意味を調べたり漢字を確かめるために辞書を引く、という行為はめったにしなくなりました。電子辞書ですら、もはや時代遅れの感があります。しかし一方で、言いたいことを適切に表す言葉が見つからなかったり、会話の途中で単語をど忘れしてしまったときに、助けてくれるツールはまだありません。日本語の文法や単語の用法を理解し、その時々文脈に応じて瞬時に言葉を補ってくれる、そんな国語辞書の登場が現実味を帯びてきました。

■ 辞書の役割

かつて、国語辞書は誰もが持っているものでした。電子辞書が広がってきた頃には、目的の検索語周辺にある言葉も学べるなど、紙媒体の辞書の方が望ましいという議論もありました。しかし、そもそも辞書は教材や読み物ではなく、不足する言語情報を速やかに提供するツール。その機能が充実していることが重要です。媒体が何かは問題ではありません。

辞書を引く時、調べたい単語がわかっている

とは限りません。説明したいことをどう表現すればよいかわからない、ど忘れしてしまった言葉を思い出したい、というような場合の方が多いのではないのでしょうか。しかも、調べる作業のために、本来の言語活動は多少なりとも中断されてしまいます。そう考えると、従来の辞書はあまり使い勝手のよいものではなかったと言えます。

パソコンやインターネットが普及し、辞書を手元に置く必要はほとんどなくなりました。モバイル機器も一般的になり、誰もがいつでもどこで

もいろいろなことを手軽に検索できます。そんな中、存在感の薄れた辞書も、より高度で柔軟な言語支援ツールへ、着々と進化を遂げようとしています。

■ ひとりひとりのニーズに対応

言語、特に母語は、意味が通じればよいわけではなく、場面や目的に適した言葉遣いや表現技法を使いこなすことが大切です。その際、子どもと大人とは、同じ事柄についてでも違

う表現になるのが当然ですし、書く・話す・読む・聞くといった言語行動によっても、言葉の使い方が異なります。一口に「単語の意味を調べる」と言っても、その状況は様々です。個々のユーザーの能力や用途に柔軟に対応できる辞書、というのはとても現代的でチャレンジングな研究テーマです。

例えば、流行語やインターネット上に特有の表現。親しい人同士なら、むしろ言いたいことが的確に伝わるかもしれませんが。しかし目上の人に対して、あるいは文化の異なる地域で使うと、思わぬ失敗になってしまうことがあります。そういう言葉は、意味だけでなく適切な用法も提示することが肝心です。また、文章を書く時には、最も適切な表現をじっくりと探したいでしょうし、会話の最中なら、素早く検索しコンパクトに結果が見られるデバイスが好都合です。新しい辞書開発には、ソフト、ハード両面からのアプローチが必須です。

■ 人の思考パターンに近づける

頭の中では様々な言葉やイメージを有機的に連想します。方向転換や飛躍も生じます。そうして考えをまとめていくものです。機械的に単語を並べ、網羅的に語釈を載せるという既存の辞書とは、言語を探索するメカニズムが根本的に異なります。その「ずれ」が使い勝手の悪



次世代型辞書開発プロジェクト

今後の多言語多文化社会において、必要な言語情報を提供するための、個別対応性、汎時性、多言語性を備えた次世代型言語情報提供サービスの開発を目的とする。利用者の能力差、用途差、使用環境差などに対応するための使用実態調査とともに、辞書情報の構造化や提供時の情報自動適応化などに関わる研究を進め、次世代型辞書のグラウンドデザインの策定と標準化を目指す。





さを生んでいると考えられます。検索手順を人の思考パターンに近づければ、より「自然な」言語支援につながるはずです。

そこで取り組んでいるのが、文脈変換というアイデアです。入力された音や文字列をそのまま扱うのではなく、文脈(話題)を認識して最もふさわしい単語や意味を出力するという考え方で、パソコンの日本語入力システム開発の分野では、20年ほど前から提案されています。漢字変換においてはかなり精度が向上しており、この技術を辞書にも応用しようとしています。

日本語は同音異義語が多い上、いくつもの語釈がつけられる単語も珍しくありません。ですから辞書で調べても、求める情報にすぐにたどり着けないこともしばしばです。複数の候補の中から、文章や会話の内容、流れに合った単語や語釈を選び、相応な詳しさを示してくれる、そんな辞書が目標です。

■ 言語能力を定量的に測る

国語辞書で「分析」という単語を引くと、「複雑な現象・対象を単純な要素にいったん分解し、全体の構成の究明に役立てること」(新明解国語辞典第7版)とあります。特段、難しい説明ではないように思われますが、この語釈のうち小学校の教科書に出てくるのは「全体、構成、役立てる」の3語だけ。小学生が大人用の辞

書を引くと、ますますわからなくなってしまいます。

私たちは、主に小学校から高校までの教育を通して、徐々に語彙を増やし、多様な文型を習得します。同じ日本語でも、発達段階によって使える単語や表現が違うわけです。ですから言語支援においては、文法的な正しさだけでなく、世代ごとに使える単語や文型に制約があることも考慮しなくてはなりません。

小学校、中学校、高校の各段階について、教科書に使われる単語の種類や出現頻度、作文に書かれる文型などを統計的に調査すると、そういった制約が明らかになります。「複雑、機能、要素」などの抽象名詞は、小学校ではほとんど使われず、高校で急激に語数が増えます。それにつれて、使える文型も広がります。「どうして私が〇〇したいか」というと、「△△したからです」と表現していたものが、「私が〇〇したいと思ったきっかけは、△△したことです」「△△したことが、〇〇しようと思うきっかけとなった」など、より論理的で豊かな表現ができるようになるのです。

■ 辞書作りは学際プロジェクト

論理的な思考をするには、正しく言語を使い、適切な表現でその思考を記述できることが大前提です。また、グローバル化が進む時代において、日本語と他言語の間にある表現の違

いや言い換えも意識しなくてはなりません。これからの国語辞書には、母語としての日本語を上手に使うための言語支援という視点が不可欠です。

多様なニーズに応える国語辞書となると、どうしても電子型になります。その開発には、言葉の意味や文法、世代間の語彙や表現能力の違いに関する言語研究に加えて、文脈変換による検索システムの構築や、使いやすいインターフェイスのデザイン、すなわち教育学、心理学、工学など幅広い分野との融合、さらに他の辞書との連動やデバイス設計では、出版や情報産業との協働も含まれます。これは、人文社会研究の在り方にも大きな変化をもたらさずにはなりません。

モノとして手に取ることは減っても、国語辞書が改訂されるたびに、新たに収録された単語や用法がニュースになりますし、編集者のこだわりに触れるのも興味深いことです。しかしもはや、私たちが辞書に求める実用機能は、そういった言葉そのものへの関心をはるかに超えています。次世代の国語辞書はどんな姿になるでしょうか。その実現に、期待が高まります。



PROFILE

やざわまこと

1957年神奈川県生まれ。筑波大学人文学類卒業。同大学院文芸・言語研究科単位修得退学後、1985年学習院女子短期大学講師、1989年筑波大学講師、1995年同助教授、2008年より現職。博士(言語学)。中国西南大学客座教授。専門は、日本語学、辞書論、文法教育史・文法研究史、国語教育論。国語辞典編集や小学校・中学校の国語教科書編集にも携わる。現在、科研費基盤(B)「作文を支援する語彙・文法的事項に関する研究」、次世代型辞書開発プロジェクト、東アジア文化的基本概念プロジェクト等に従事する。



自分を信じて、好きな分野を突き進む

■ 在学中は材料の研究をしていたそうですね。

高校時代は化学が得意だったのですが、大学生活を通じてクルマ好きになり、自動車エンジニアになるには、純粋な化学では少し方向が違うと思って、材料研究を専攻しました。形状記憶合金の実用化に向けた研究がテーマでした。

私が所属していた研究室は、自動車メーカーとのつながりもあって、そこへ就職するつもりでした。それで、その会社に勤めていた先輩に、仕事の様子を聞いてみたくです。すると、太陽電池の研究をしているということでした。自動車メーカーに入っても、自動車の開発に関わるとは限らないというのはショックでした。

就活を控えて将来について改めて考えていた時、趣味で購読していた自動車専門雑誌に、その編集部の新入募集の告知がありました。とにかくクルマに関わる仕事がしたかったので、迷わず応募しました。その頃、東京を拠点と

するクルマ好きの人たちの集まりに入っていて、メンバーや彼らの所有するクルマを紹介するためのウェブマガジンを立ち上げて、実験の合間に記事を書いたりしていたのですが、それが出版業界での即戦力として認められたようです。指導教員や友人には呆れられましたけど。

■ 学生時代のクルマとの出会いが大きかったですね。

筑波大は「学際的」ということで、学部の枠にとらわれずに、いろいろな授業が受けられると聞いていましたし、江崎玲於奈さんが学長でしたから、きっと何か違うことをもたらしてくれると期待して入学しました。

けれども実際には、必修科目がたくさんあって、本当に興味のある科目を履修するための時間のやりくりはとても無理。年中試験に追われて、思い描いていた学生生活とはかけ離れた日々でした。友人たちと励まし合いながらも、

サークル活動や学園祭などに参加する気力もなく、留年せずに卒業する、それが目標になってしまっていました。

そんな時に、スーパーマーケットの掲示板で、ボルボを50万円で売ります、という張り紙を見つけたんです。当時としては破格に安かった。それをきっかけに、安い中古車を探しては、半年毎ぐらいに乗り換えるようになりました。その頃は交通の便も良くなって、つくばでの生活に車は必需品。親戚から譲り受けた外車に乗っているような学生も多かった、そういう状況がひとすじの光を与えてくれました。

■ クルマを扱うことは同じでも、エンジニアと出版とは関わり方が随分違います。抵抗はありませんでしたか？

その自動車専門雑誌は、研究用の機材を使って自動車の性能計測をするような、ちょっとアカデミックな商品テストを目玉にしていまし



ドイツの自動車メーカーBMWの日本法人で広報部長を務める田中誠司さんは、自動車エンジニアを目指して筑波大に入学しました。しかし、学生生活の中でクルマとの付き合い方を広げ、別の側面からクルマと関わる道を選びました。

ビー・エム・ダブリュー株式会社
ディレクター・広報部長

田中誠司 氏



PROFILE

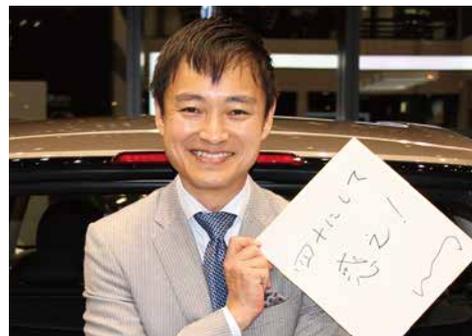
たなかせいじ

1975年 東京都生まれ

1997年 筑波大学第三学群基礎工学類卒業

1999年 同 大学院工学研究科中退

自動車専門誌「カーグラフィック」編集記者を経て編集長を務めたのち、フィアット・グループ日本法人にてフィアット・ブランドのマーケティング全般を担当。ビー・エム・ダブリュー株式会社に移籍し、広報を担当する。2016年より広報部長に就任し、日本法人の広報活動全般を統括しミュンヘン本社との調整にあたるほか、Executive Committeeの一員として同社の運営全般に携わる。



40歳になったら感うなかれ、というのが昔からの教えですが、いまどきは40こそが悩み苦しみの始まりなのではないかと思えます。突如やってくる幸・不幸にいつでも対応できる力をつけたいですね。

た。メーカーとは違った視点で自動車のスペックを批評する、そういう精神があって、エンジニア的な関心も十分に満たしてくれる職場でした。

エンジニアだと、個々の部品に特化した研究になってしまいますが、雑誌では自動車をトータルに扱います。F1から燃料電池車まで、あらゆるメーカーのあらゆる車種に乗ってみることができるし、性能や使い勝手を追求したいクルマ好きにとっては最高の仕事ですね。ただ、編集部では6~7年ぶりの新人ということで、早朝から撮影用の車を磨かされるなど、最初の数年間はとてもしつかったです。それでも、20代後半で新しい雑誌の創刊を任せられたり、最終的には学生時代に愛読していた老舗雑誌の編集長も務めることができました。

出版の世界で活躍していた最中に、新しい職種への転身を図られました。きっかけはどんなことだったのでしょうか？

編集長を3年半ほどやってみて、やりたいことはやり尽くした、という感じがありました。社内での内紛もあったりして、そろそろ別のことをやってみたいという気持ちになっていたところへ、雑誌編集を通じてお付き合いのあった2つの自動車輸入会社からお声がけをいただきました。そのうちの1社が現職です。

現在は、広報部長としてテレビ・雑誌・新聞などのメディア対応に携わっています。転職とはいえっても好きな自動車の世界ですし、出版業界での経験や人脈が生かせる転職です。外資系ということもあって、要求は厳しいですが、チャレンジングな仕事です。

キャリアを築いていく上で、筑波大での経験は生きていますか？

筑波大はいろいろな意味で鍛えられる場所です。多くの学生は地元を離れて、自分の生活確立することから始まります。お金や時間の使

い方を計画し管理しなくてはならないし、授業をサボるにしても、その分のノートを借りるなどの手配が必要です。自分の好きなことばかりもしてられません。そういう状況に置かれると、人はたくましくなります。私も、そんな中で鍛えられたという実感があります。

また、筑波大は他の有名大学に比べると典型的なイメージがなく、色眼鏡で見られたり、変なプレッシャーを感じることはありません。これも、社会に出てみて感じる居心地の良さだと思います。

筑波で学ぶ後輩たちに向けてメッセージを。

卒業までの間に、みんなそれなりにいろいろなハードルを越えて、鍛えられています。だから、自分は勝ち上がれる、選ばれるべき人間だと信じてほしい。その自信を糧に突き進んでいけば、きっと何かを成し遂げられると思います。

附属学校 めぐり

自分を思いっきり

本学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

筑波大学附属桐が丘特別支援学校

「桐が丘祭：小学部 学習発表会」



■ 本番で実力を発揮!

附属桐が丘特別支援学校(桐が丘)の学校祭「桐が丘祭」の最初のイベント、小学部の学習発表会。1・2年生、3・4年生、5・6年生のグループが、それぞれ取り組んできた学習活動の成果を発表します。会場の体育館は、教職員や保護者、中・高等部の生徒たち、そして近所に住む人々などでいっぱいです。緊張感の中、幕が上がリ、ライトがあたると発表の始まりです。

舞台上では全ての児童が主役になって発表します。先生たちも助けてあげることはできません。でも心配無用。練習の時はおぼつかなかった子ども、本番では堂々とした発表ぶりです。これが桐が丘の底力。いつも思い描いている「自分たちはこうありたい」という姿を存分に見せてくれます。

今年は、1・2年生は、グローバル教育を先取りし、様々な言語でコミュニケーションを試みる「いろいろな人と話してみよう!」、3・4年生は、オリンピック・パラリンピック教育を意識して課題解決に挑んだ「作っちゃおう ぼくたちのスポーツ!」、5・6年生は、この冬から始まる新しい校舎の建設を控えて、学校の歩みを振り返る「桐が丘の過去・未来」と題した発表が行われました。いずれも自分たちで選んだテーマで、総合的な学習の時間などを使って準備を進めてきました。

■ 先輩の姿を追って

中でも、5・6年生の発表はユニークです。「KBSニュース」というニュースショー形式は平成15年から続く独特のスタイル。テーマに沿って、教職員や中・高等部の生徒たちへの取材

や調査を計画・実施し、その結果を映像も交えて紹介します。キャスターやレポーターになりきって、服装や言葉遣いも大人顔負けのっこよさです。

毎年恒例の発表スタイルだからこそ、下の学年の子どもたちにとっては憧れの姿、次は自分の番だという心構えになり、上の学年の生徒たちにとっては自分の経験からアドバイスをする機会になります。小学部のうちから、他学年だけでなく中・高等部の生徒とも交流し、身近な目標を持つことができるのは、普通校にはない特長です。

インクルーシブ教育や共生社会がうたわれ、障害があってもなるべく普通校に通う方が良いようにも思えます。しかし健常者の中ではどうしてもお客さん扱いされてしまったり、体育などではみんなと同じことができない場面も多いのが現実。桐が丘では、みんなが不自由を抱えな

表現する晴れの舞台

桐が丘祭

附属桐が丘特別支援学校の学校祭。今年は11月3・4日の2日間に渡って、小学部の学習発表会および中・高等部の企画・発表・展示が行われた。児童・生徒が自ら考え進めてきた活動の成果がさまざまな形で表現される他、模擬店やバザーもあり、近隣の住民も数多く訪れる恒例行事となっている。今年のテーマは「桐FEVER!!～情熱を注げ～」。自分たちもお客さんも盛り上がりつつ最高の学校祭にしたい、という児童・生徒たちの思いが込められた。

がら一緒に活動するので、自分も動けるという実感が得られ、互いに気遣い励ましあうことも身に付きます。先生たちも、できるだけ手を貸さずに見守る姿勢を貫いています。それが子どもたちのやる気を呼び起こし、本来の能力を発揮させるのです。

■ 思い出のイチヨウの木と大スクープ

KBSニュースでは、学校の歴史や、もうすぐなくなってしまう校舎に対するみんなの思いが紹介されました。タイムトリップをして開校当時の学校から中継するなど、趣向を凝らしたレポートに加え、自分たちが入学する前の校舎の様子を教職員にインタビューしたり、校内の思い出の場所などについて中・高等部の生徒にアンケート調査をした結果が報告され、場内にいる人々はそれぞれの思い出を巡らせているようでした。また、落ち葉や臭いに悩まされた校庭のイチヨウの木が意外な人気スポットだったことも明らかになり、切り倒されてしまうことを残念がる声も紹介されました。

そしていちばんのスクープが、新校舎の完成予定図です。煉瓦造りの校舎のイメージ図が

スクリーンに映し出されると、大きな歓声が上がりました。待望の冷暖房に広い廊下、トイレも増設されるとのことで、会場の盛り上がりは最高潮に達しました。

■ 新しい校舎への期待とともに

桐が丘は、国内で唯一の肢体不自由児のための大学附属学校として、特別支援教育の先導的な役割を担ってきました。昭和33年の開校当初はポリオ（小児まひ）の子どもが主で、当時の写真を見ると、ほとんどが松葉杖を使っています。そのため、バリアフリーのような配慮はそれほど必要ありませんでした。その後、周産期医療の進歩に伴い低出生体重児が増え、脳性まひの発生が高まり、車椅子を必要とする子どもが多くなりました。車椅子を使うようになると、そのままの校舎ではかなり不便を感じます。

新しい校舎の設計には、子どもたちの意見もたくさん取り入れられています。車椅子で楽にすれ違うことのできる廊下の幅や、操作のし



やすいスイッチの高さなどは、自分たちで計測して提案したの。それが実現するのですから、今回の発表にはいつもにも増して熱が入って当然です。

小学部の発表が終わると、保護者の有志によるコーラスが披露されました。「おかあさん、がんばれ!」と、いつもは励まされる側の子どもたちから声がかかり、会場は暖かい空気に包まれました。

学習発表会は、開校まもなくからずっと続けられてきた伝統のある行事です。指導方法の蓄積や保護者間のネットワークもあります。古い校舎への愛着を持ちつつ、みんなの期待が詰まった新しい校舎でも、楽しい思い出と成長の果実がたくさん生まれることでしょう。



西垣昌欣
副校長

小学部主事の石田周子教諭とイチヨウの木の前で

児童の活躍する姿は、教育の成果のバロメーター

桐が丘特別支援学校は、個々の個性と障害の実態に応じた教育を行い、豊かな人間性を持ち、卒業後の社会参加や自立を目指す人間の育成を学校教育目標に掲げています。そのためには、小学部・中学部・高等部の各段階で、子どもたちに身に付けさせたい力をしっかり育成していく教育のリレーが大切になります。子どもたちの主体性を大切にしながら、教育課程の全体を通じて、コミュニ

ケーション能力や情報活用能力、問題発見・解決能力等の育成に重点を置いて取り組んでいます。

桐が丘祭は、児童・生徒たちが、それぞれの段階に応じて、目的達成のため自己の能力をフル活用して取り組む行事です。小学部児童の活躍する姿は、育てたい力の土台作りがうまくいっているのか、その手応えのバロメーターになっています。



躍 波 筑

はじまりのミヤチ

鉄棒競技のスペシャリスト。'17世界体操で最高難度の技に世界で初めて成功した。東京2020とパリ2024のオリンピック2大会での鉄棒連覇をめざす。体操界のレジェンド内村航平選手を尊敬、しかし鉄棒では超えていく。

|| O T T A K A || Y A C H I ||

人間総合科学研究科 体育学専攻博士前期1年 **宮地 秀享** さん 体操競技

2017年10月、カナダ・モントリオールで行われた体操世界選手権、宮地秀享さんは種目別競技の鉄棒でメダルに挑んだ。結果は5位と、目標には届かなかったものの、1万人の観客を前に、最高難度の技を世界戦で初めて披露し、会場は歓声に包まれた。バーを越えながらの後方伸身2回宙返り2回ひねり懸垂、この大技「伸身ブレットシュナイダー」は、後に国際体操連盟の認定を受けて「ミヤチ」の名が付く。まさに、体操の歴史に名前が刻まれた瞬間だった。

この大会で宮地さんが新たに見つけたことは、失敗することの価値だった。3歳から始めた体操の世界は、中・高生世代ではミスが許されない厳しさが当たり前環境。いつの間にか

失敗は恐れとなっていた。

金メダルを手中に収めるつもりで臨んだ決勝、最難関のミヤチには成功した。しかし直後の技で落下してしまう。頭の中は真っ白になった。手首のサポーターを整えながら、「帰りたい」と思ったという。同時に、応援してくれている人達の顔が浮かんできた。メダルへの希望をかけてもう一度やり直した。力強く体を振ってミヤチ、それに次ぐ全ての技を成功させて着地。しかし得点は伸びず、スコアボードを見つめる宮地さんには、悔しさしかなかった。「こんな失敗の仕方は初めてで、対処ができませんでした。これからは恐れずに、たくさん失敗しておきたい。一番成功したい時にうまくいくように」。

それまで宮地さんは世界レベルでは無名の

選手だった。後に、誰も成功したことのない大技を体得するとは、周囲の誰も思っていなかった。ところが大学院進学後、たったひとりでこの技を完成させ、6月には代表候補に浮上した。その過程を見てきた後輩たちは驚きを隠さない。本人は「冬頃から『代表に入る』とは言ってたんですけどね」と笑う。新技のベースとなる鉄棒技ブレットシュナイダーを卒業研究のテーマにし、身体感覚と無意識の動きを客観的に記述することで、意識すべきポイントが明確になった。それが今回の飛躍につながった。大学院では新技「ミヤチ」の研究で、実践と理論ともに鉄棒競技の第一人者になることを目指す。

最高難度の技の名にふさわしい選手になるべく、宮地さんの新たなステージが始まった。



中央体育館内の体操競技場。画像システムなど最新の設備が揃う



後輩にひびく
いつ、どのくらい成長できるかなんて、
誰にもわかりません。うまくいかない
ときも今の努力を信じて。高校生の僕
にも伝えたい、「成長は止まってるんか
いない。気にしなくていいよ」(笑)



動 大生

未来をうたう

メッセージング「IMAGINE THE FUTURE ~未来を想え」は、本学の建学時の理想である「開かれた大学」をイメージして2010年に卒業生によって作られた。式典では、学生の中から選ばれた「歌い手」が新入生や卒業生にこの歌を贈る。

MAI TAKAFUJI

YUKI SATO

人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻博士後期2年

人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻修士1年

高藤真依 さん

佐藤悠樹 さん

“君はなぜ そして僕らの ここに来た意味も”
本学メッセージング「IMAGINE THE FUTURE ~未来を想え」の一節。「この部分は新入生に、他にも岐路に立つ学生それぞれに、美しく語りかける歌詞が好き」と歌い手の高藤真依さんは話す。

高藤さんは他大学の心理学を卒業後、その先の進路を定められずにいた。本当にやりたいことは何か、それを叶えるためにどこに向かえばいいのか、悩み、多くの時間を費やした。今は神経科学の研究者を志して、本学大学院の博士課程で学んでいる。「この大学は、ようやく見つけた『自分のやりたいこと』ができる場所です」。これまでの道のりをメッセージングに

重ね、歌い手としてそれぞれの「IMAGINE THE FUTURE」をみんなの元へ届けたいと思う。

同じく歌い手の佐藤悠樹さんは、メロディに川の流れを想像しながら歌う。小さな支流が徐々に広がって大河になるような曲調と、大学で成長していく学生の姿を重ねる。「入学式で初めてこの歌を聞く新入生は『何だ?これは』と思って笑う、卒業式では歌の意味を感じながら学生生活を振り返って泣く。一人一人には会ったことがないけれど、同窓生の人生の節目に歌わせてもらえるのは光栄」と語る。

佐藤さんは、医学を志望しながらも生物学類に入学した。家庭の事情など、努力だけではど

うしようもないこともある。いわば挫折感とともに始まった大学生活だった。「でもここは総合大学。目の前には自分の知らない分野が広がっていて、しかも好きな分野の授業が受けられる。可能性を縛らなくてもいいんじゃないか」と視野を広げた。大学院では、小学生の頃からの夢だった、神経再生に関する研究に取り組んでいる。将来は、医師の研究プロジェクトをサポートするメディカルサイエンスリエゾンを目指す。

迷って立ち止まったり、やり直したりしながら進んでいく。発展途上の学生時代だからこそ、心に響くメッセージがある。歌は続く、

“共に生きる 人類(ひと)の未来を 想え”。

後輩にひとこと
困難にぶつかったとき「ダメな自分」
なんて思わなくていい。その壁は、
そもそも誰もが大きいと思う大きな
壁です。時間をかけていいから、焦らずに夢
に近づいて





ウズベキスタン共和国

Homeland

本学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。

夢はアグリビジネスで起業すること

● Japan-Expertプログラムに秋入学

2017年10月に、Japan-Expert(学士)学位プログラムのアグロノミスト養成コースに入學しました。日本で働きたい、日本に関わる仕事をしたいという留学生が対象で、同期生は私の他に7人です。このコースでは、まず日本語を集中的に学び、その後は一般の学生と一緒に専門科目を履修します。

半年間は、1限から4限まで日本語や日本文化に関わる授業を受けています。宿題に出されたA4サイズの用紙に、びっしり書かれた日本語を理解するのに、はじめは10時間かかりましたが、1ヶ月後には1時間くらいで読めるようになりました。

4月からは、生命環境系の納口り子先生の下で農学に関する専門科目を学びます。納口先生は、ウズベキスタンに視察などで訪れる日本人の農業関係者からも、農業経営学分野の研究者からも、とても有名な方だと伺ってい

たので、そのような先生に学べるのはとてもうれしく思います。

●間違えて借りたDVDで日本語学習へ

私はウズベキスタンの首都タシケントの出身です。タシケントは物価も安く生活しやすい町です。公用語はウズベク語ですが、1991年に独立するまではソ連の統治下にあったので、ほとんどの人はロシア語ができます。

私の国でも日本のアニメはとても人気があります。中学3年の夏休みに、アニメ「NARUTO ナルト」のDVDを借りました。ロシア語吹き替えのつもりが、日本語版を借りてしまって、再生してびっくり。明日にでも借りなおそうと思いながら、見ていたら、語感や口調がアニメにぴったりで、だんだん面白くなってきました。

たったこれだけの出来事が日本と私を結びつけました。翌日DVDを返しに行く代わりに、ウズベキスタン日本センターに行きました。ここで

は、ウズベキスタン人に向けた日本語講座を開いていましたので、私はすぐに短期講座にエントリーしました。

さらに高校に進学してからの3年間は、放課後に週3回の日本語講座を受講しました。その後1年は日本語初級クラスで教えながら中上級クラスに通い、そこで成績優秀者になったことで、ご褒美に日本旅行に行けることになったのです。初めて日本に滞在して、ますますこの国が好きになりました。出会う人はみんな親切だし、知らない人に対しても礼儀正しいと思いました。

●大学進学、そしてグローバルヴィレッジのシェアハウス生活

高校を卒業して、私はなんとしても日本で学びたいと思って、タシケントで開催された日本留学フェアに参加しました。日本の様々な大学から留学生が体験を紹介する中、筑波大の先輩



タシケントにあるバラク・ハーン・モドレセ。16世紀に神学校として建てられた



国際ビジネスセンター(右)。6Fにウズベキスタン日本センターがある



Jamkhur Ziyokhujayev

ジャムフル・ジヨフジャエフさん

所属 | 生命環境学群
生物資源学類1年



留学生からは、他の人たちとは比べものにならないほど、大学への愛着が伝わってきました。プログラムの内容や他の条件もありますが、先輩の声が一番の決め手になったと思います。

いま、シェアハウス型宿舎「グローバルヴィレッジ」に4人の日本人学生と一緒に住んでいます。これまでは全く料理をしなかったのに、日本に来てからは毎日自炊しています。シェアハウスでは掃除や共用スペースの使い方には気をつけているつもりです。テレビや洗濯機などの備品も備わっているし、困ったときにはルームメイトにすぐに聞けるのでとても助かっています。お互いにプライバシーには気を配っていて、ノックして返事がなければ一人の時間だというのが暗黙の了解になっています。

●地下鉄は撮影禁止?!

NHKの世界ニュースで農家の暮らしを見るたびに、日本の自然はきれいだと思ってい

ました。樹木一本をとっても、その形だけで美しいと思います。

ウズベキスタンの夏は、50℃まで気温が上がりますが、公共バスにはエアコンがありません。冬の寒さもとても厳しいので、旅行をするなら春がお薦めです。あちこちで、アプリコットやチェリーが咲き誇って、サクラのようにきれいです。

外国人観光客には、タシケントよりもブハラやヒヴァ、サマルカンドなど歴史的な街が人気。モスクや大学など昔のまま、博物館にいるようです。でも、私がいちばん好きだった場所は、何と言ってもウズベキスタン日本センター。観光やビジネスで日本からウズベキスタンに来る人に、必要な情報を提供してくれます。

タシケント市内の地下鉄は、ソ連時代に造られたもので内装がとても豪華です。2004年に市街地でテロが起きてからは、セキュリティチェックが厳しくなって、地下鉄だけは撮影が禁止されています。警察に見つかるので注意されるので気をつけてください。

●夢の途中

ウズベキスタンの経済は農業の発展にかかっています。将来は、これから学ぶことを生かして、母国に貢献したいと思っています。知識も大事ですが、ビジネスには経験が必要です。日本の農業関連企業でキャリアを積んで、母国で農業ビジネスを興すのが夢です。

日本語はだいぶ上達しましたが、農学を学ぶ上での知識がまだ不足しています。ひとつひとつ積み重ねていきたいです。半年間の日本語学習では、トップになるつもりで気合を入れて来たのですが、入学してみたらみんなすごく優秀で、簡単ではなさそうです。でも故郷の家族や先生方も私の活躍を楽しみにしてくれていますし、何より私自身が自分に期待しているので努力は惜しみません。

レベルの高いライバルがいることは、ありがたいです。尊敬する先生に認めてもらえるよう、積極的に学生生活を送りたいと思っています。



観光で人気があるヒヴァの街並 (Photo by Takeshi Akiba)



伝統料理のプロフ、日本のピラフはトルコ風。似ているが違う (Photo by Takeshi Akiba)



友だちの実家で、唐揚げを作ってもらいました

TSUKU COMM TOPICS

ダイバーシティ

多様性を考える機会に ダイバーシティ Awareness Week 2017



パネルディスカッション、東京2020パラリンピックに向けて～筑波大学ができること～

10月2日から6日、社会における人の多様性について、楽しみながら考えるきっかけにしようと、本学初の試みとなる「ダイバーシティ Awareness Week 2017」を開催しました。

イベント「Blending colors～LGBTサークルによる意見交換会～」から、最終日のファカルティ・デイベロップメントを目的とした講演会「ダイバーシティ推進研修会～国籍、性別、障害を越えた多様性がもたらすもの～」まで、学内外16組織の協力で13のプログラムを実施。「東京2020パラリンピックに向けて～筑波大学ができること～」ではバーチャルリアリティの研究者とパラリンピアンが、「人工知能研究からみた身体障害者支援の未来」では人工知能の研究者と障害のある学生が公開ディスカッションするなど、多彩な研究者・学生を抱える本学ならではの情報発信や意見交換が行われました。

本学は、年齢、性別、国籍、文化の違い、障害の有無に関わらず、人の可能性と多様性を尊重し学びあえる大学、そして個性と能力が発揮できる社会の実現を目指しています。そのため、このような活動を継続していきます。



だれでも気軽に!アダプテッド・スポーツ/車いすポートボール体験



セクシュアルマイノリティ写真展「OUT IN JAPAN@筑波大学」

松本正幸教授が「つくば奨励賞(若手研究者部門)」を受賞 「2つのドーパミン神経システムとその神経回路基盤」に関する研究が評価

医学医療系の松本正幸教授が、「第28回つくば奨励賞(若手研究者部門)」を受賞しました。この賞は、茨城県内において顕著な研究成果を収め、今後の活躍が期待される40歳以下の研究者に贈られるものです。11月21日につくば国際会議場で茨城県科学技術振興財団主催の授賞式典が開催され、江崎玲於奈賞、つくば賞とあわせて表彰式、および受賞者による記念講演が行われました。

ドーパミン神経細胞は「報酬」を得るための学習や意欲に重要な役割を担っていますが、そのメカニズムは不明でした。そこで松本教授は、中脳に分布するドーパミン神経細胞から前頭前野に伝達される神経シグナルに注目しました。その結果、報酬が得られない時にドーパミン神経細胞活動が抑制されるのは、脳の中心部にある外側手綱核という部位が興奮することによる、すなわち、外側手綱核がドーパミン神経の抑制性応答

の起源であることを突き止めました。

さらに、ドーパミン神経細胞が、「報酬」に加えて「運動・認知機能」に関連した情報も伝達することを見だし、報酬シグナルと運動・認知シグナルを伝達するドーパミン神経細胞は、それぞれ中脳の異なる領域に分布していることを明らかにしました。これらの成果が、「2つのドーパミン神経システムとその神経回路基盤」として、この度の受賞の対象となりました。



本学のLGBTに関する取り組みが 大学初、ゴールド受賞&ベストプラクティス選出

企業・団体等における性的マイノリティ(以下、LGBT)に関する取り組みを評価する「PRIDE指標2017」において、本学が大学として唯一、最高評価のゴールドを受賞しました。

この指標は、企業などの枠組みを超えてLGBTの人々が誇りをもって働ける職場の実現を目指す国内の任意団体 work with Pride が2016年に策定し、企業・団体がLGBT関連の施策を行う上での参考となるものです。評価指標には、PRIDEの各頭文字に合わせて、Policy(行動宣言)、Representation(当事者コミュニティ)、Inspiration(啓発活動)、

Development(人事制度・プログラム)、Engagement/Empowerment(社会貢献・渉外活動)の5項目があります。本学は「LGBT等に関する筑波大学の基本理念と対応ガイドライン」を2017年3月に作成し、LGBTに関する相談窓口、氏名・性別の情報とその管理、学生生活・就活などについて対応と方針を示しています。このガイドラインの具体性、インターネットで公開していることや学生教職員を問わず全構成員を対象にしていることなどが評価され、特に優れた取り組みとしてベストプラクティスにも選出されました。



キッズ・ユニバーシティの課外活動 ちよこっと理科(+国語・社会・算数)クラブ リターンズ

10月29日、本学東京キャンパスにおいて、「ちよこっと理科(+国語・社会・算数)クラブ リターンズ」が開催されました。毎年4月に筑波キャンパスで行われる「キッズ・ユニバーシティ」の課外活動として企画された、小学生向けの体験型学習イベントです。今回は、一昨年度に実施した「ちよこっと理科クラブ」をパワーアップ。本学の強みの一つである教育学分野の知見を生かし、国語・社会・算数の要素も取り入れて、より幅広く学習への興味を喚起する内容になりました。季節外れの台風接近によるあいにくの空模様にもかかわらず、300人近い子どもたちが参加し、いつもの学校とはちょっと違うテイストの様々な学習プログラムを楽しみました。

1日を通して、植物や昆虫の観察、光や波の実験、国語辞書を使ったワークショップ、かなの成り立ちを知るカードゲーム、プロの狂言師による演技体験、地図や国旗を学ぶクイズ、図形パズルに挑戦などなど、盛りだくさんのプログラムが並行して行われました。いずれも、本学の教員や学生の指導のもとに、熱心に取り組む子どもたちの姿が見られました。また、いろいろな工夫を施した紙飛行機を作って飛距離を記録するコーナーも、終日賑わいました。

さらに、各プログラムを巡るスタンプラリーにも、たくさんの子がエントリー。この日のために用意されたガチャマシンを回して、筑波大スペシャルグッズをゲットしました。



悪天候にもかかわらず、会場は大賑わい



「ちよこっとラボラボ」では複数のプログラムが同時進行



広いロビーを活用して「ちよこっと紙飛行機選手権」も



和泉流狂言師の能村晶人さんによる狂言教室ではみんなも声を出して体験しました



「国語辞書で遊ぼう」コーナーでは保護者もクロスワードパズル作りに挑戦

昆虫の翅はどこから生えるかを解明

生命環境系(山岳科学センター菅平高原実験所)の町田龍一郎教授は、福島大学との共同研究で、昆虫の翅は、発生の過程でどこから生えるかを解明しました。



町田龍一郎 教授

昆虫は、種数において全動物の75%を占めており、地球上で最も繁栄している動物群です。その繁栄の秘訣としては、数ある節足動物のなかで唯一、翅を獲得し、空中への進出を可能にし

たことが大きいと考えられています。しかし、翅が体の構造のどこに由来しているかについては、これまで答えが出ていませんでした。

町田教授らは、フタホシコオロギの卵が成虫になるまでの全発生過程を、走査型電子顕微鏡を用いて仔細に追跡しました。その結果、翅は発生の過程で胚の体節側面にあたる側板から生え、成長するに伴って背面に移動するものの、側板そのものは脚の最も付け根にあたる部分に由来することを突き止めました。

翅を羽ばたかせるには、しっかりした土台の上に固定され、かつ、翅の付け根は可動性で、しかも筋肉と繋がっている必要があります。今回の発見は、昆虫が既存の体の構造を改変し、理に適った仕組みで、翅を手に入れたことを示しています。

水素吸蔵性能に優れた新材料を開発

数理物質系の近藤剛弘准教授は、東北大学、物質・材料研究機構、東京工業大学との共同研究により、水素吸蔵材料や電子材料として優れた特性を持つ、新しいシート状物質(ホウ化水素シート)の生成に成功しました。

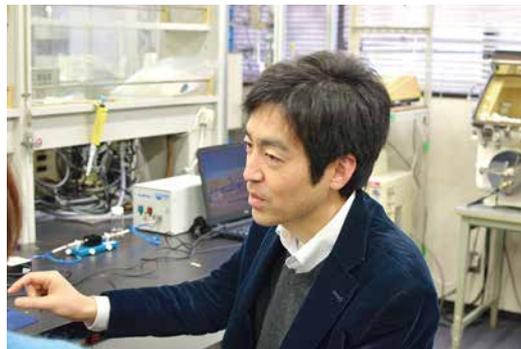
炭素原子一層でできたグラフェンに代表されるような、一層から数層の原子からなる非常に薄い二次元物質と呼ばれる物質群は、高性能の電子材料や触媒材料の候補として世界中で活発に研究が行われています。また、種類の異なる二次元物質を組み合わせることで、様々な性質を発現することが分かっており、幅広い用途に応用できる可能性を秘めています。

ホウ素と水素のみで構成される二次元物質(ポロファン)は、グラフェンを凌駕する優れた電子材料特性や水素吸蔵特性を持つはずだとい

う理論的な予想が報告されていましたが、生成には至っていませんでした。近藤准教授らは、二ホウ化マグネシウムという物質に含まれるマグネシウムの正イオンを水素の正イオンと交換することにより、室温・大気圧下という温和な条件でポロ

ファンが生成できることを見だし、「ホウ化水素シート」と名付けました。

ホウ化水素シートを既存材料と組み合わせることにより、資源・エネルギー・環境に関する様々な問題の解決に資する利用発展が期待されます。



近藤剛弘 准教授

附属図書館特別展

「江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界-」を開催

10月10日から11月19日まで、本学中央図書館において、特別展「江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界-」が開催され、学内外から延べ2,835人が訪れました。

本特別展では、原作の源氏物語の世界をふまえ、江戸時代の浮世絵師、歌川国貞の描いた『紫式部源氏かるた』を通して近世的な文化を

鑑賞してもらえるよう、趣向を凝らしました。

附属図書館が所蔵する源氏物語の写本や版本などの貴重書に加え、注釈書、紫式部が描かれた資料を展示した他、源氏物語を元に描かれた源氏絵は歌川国貞と歌川豊国、尾形月耕の3人の絵師の作品を対比して紹介しました。

会期中には、展示を企画した図書館情報メディア系の綿抜豊昭教授による、特別講演会およびギャラリートークが開催されました。本学で開発した、「浮世絵鑑賞システム」のデモンストレーションも行われ、最新デジタル技術を貴重資料に融合させた浮世絵の世界に、観覧者は見入っていました。



中央図書館では毎年、特別展を開催しています。

これまでの内容は本学附属図書館のWebサイトでご覧いただけます。

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/special-exhibition>

自然保護寄附講座 国際シンポジウム

「Local Communities and Nature Conservation: 地域に根差した自然保護」

11月23日、本学東京キャンパスにおいて、国際シンポジウム「Local Communities and Nature Conservation: 地域に根差した自然保護」が開催されました。これは、本学大学院自然保護寄附講座の学生が企画したものです。

環境保全やエコツーリズムに関する国内外の専門家6人が、それぞれの地域における活動事例を紹介し、学生20人による研究成果発表（ポスターセッション）も含め、120人におよぶ参加者とともに、自然保護活動と地域社会について、熱

心な議論が行われました。

総合討論では、より多くの人が地域の自然への愛着を持つことの重要性が改めて確認され、様々な分野や立場を越えた交流の場となりました。



「若い力で復興・創生を担う」筑波大学高大連携シンポジウム2017 アクティブラーニングの成果を発表

11月4日、学園祭「雙峰祭」において、「筑波大学高大連携シンポジウム2017」を開催しました。

本学では出前講義や模擬授業、公開講座など様々な形で高大連携活動を行っています。その一つに、都市計画を専攻する学生と指導教員、茨城県内などの高校生が協働して地域社

会の課題に対して客観的・数理的アプローチで解決法を探るプロジェクトがあります。本シンポジウムは、この活動の総括としてその年の成果を発表するものです。

2009年の開始以降、9回目となる今年は「若い力で復興・創生を担う」をテーマに、高校生がグループごとに、自分たちの住む地域の課題を

見つけ、データ収集や分析、解決策の提案などに取り組みました。本学学生は各グループにファシリテーターとして参加し、作業やプレゼンテーションの進行をサポートしました。同じ課題にとともに取り組む中で、高校生は研究プロセス、大学生はファシリテーションスキルをそれぞれ実践的に学ぶことができる点が、本プロジェクトの大きな特徴です。

シンポジウムには、茨城県内の日立北高校、竜ヶ崎第一高校、水海道第一高校、水海道第二高校、石下紫峰高校、さらには北海道の津別高校から、総勢70人の発表者と、大学関係者や雙峰祭に訪れた一般の方々など、合わせて200人が参加しました。中でも常総市内3校の生徒は水害復興、また津別高校の生徒は過疎脱却という、現実に直面する地域課題について、神達岳志常総市長、佐藤多一津別町長が見守る中、若い視点から解決策を提案しました。



トヨタ自動車相談役、豊田中央研究所代表取締役会長の加藤光久氏に、基調講演と総括をいただきました



自然保護寄附講座

本学人間総合科学研究科世界遺産専攻および生命環境科学研究科が、個人の篤志家からの寄附により設置しているもので、大学院生を対象に、平成26年度から5年間にわたり開講しています。自然と文化にまたがる学際的な知識と、国際的な経験をもとに、自然保護に関する様々な機関で活躍する人材の育成を目指しています。

ユニバーシアード競技大会のメダリスト大集合



8月に台湾の台北で開催された、第29回ユニバーシアード競技大会において、本学学生および卒業生が12の競技で計23個（金7個、銀7個、銅9個）のメダルを獲得しました。

10月2日、大会の成績を報告するため、日本選手団の旗手を務め、柔道女子63kg級および女子団体が優勝した能智亜衣美さん（体育専門学群4年）はじめ、競泳女子4×100mメドレーリレーで優勝・女子50mバタフライで3位の平山友貴奈選手（同4年）、陸上男子4×100mリレーで優勝した山下潤選手（同2年）、男子サッカーで優勝した中野誠也選手（同4年）、戸嶋祥郎選手（同4年）、三苫薫選手（同2年）、女子サッカーで2位の水谷有希選手（同3年）、女子バレーボールで2位の井上愛里沙選手（同4年）、丸尾遥香選手（同3年）、水泳飛込女子団体が3位の榎本遼香選手（同3年）、男子バレーボールで3位の酒井啓輔選手（同3年）が、それぞれ所属する運動部の監督とともに、永田恭介学長を訪問しました。

●ユニバーシアード競技大会の入賞者

在 学 生	柔道	能智亜衣美（体育専門学群4年）	・女子63kg級 1位 ・女子団体 1位
	水泳／競泳	平山友貴奈（体育専門学群4年）	・女子4×100mメドレーリレー 1位 ・女子50mバタフライ 3位 ・女子100mバタフライ 7位
		岡野圭穂（体育専門学群3年）	・女子50m自由形 5位
	水泳／飛込	大久保琳太郎（体育専門学群3年）	・男子200m平泳ぎ 6位
		榎本遼香（体育専門学群3年）	・女子団体 3位 ・女子10mシンクロナイズド 4位 ・混合3mシンクロナイズド 5位 ・混合団体 5位
	水泳／水球	齋藤 葵（体育専門学群4年）	・女子 3位
		稲葉航平（体育専門学群4年）	・男子 6位
		大本航生（体育専門学群3年）	・男子 6位
	陸上	山下 潤（体育専門学群2年）	・男子4×100mリレー 1位 ・男子200m 8位
		サッカー	中野誠也（体育専門学群4年）
	戸嶋祥郎（体育専門学群4年）		・男子 1位
	三苫 薫（体育専門学群2年）		・男子 1位
水谷有希（体育専門学群3年）	・女子 2位		
バレーボール	秦 耕介（体育専門学群4年）	・男子 3位	
	酒井啓輔（体育専門学群3年）	・男子 3位	
	井上愛里沙（体育専門学群4年）	・女子 2位	
	丸尾遥香（体育専門学群3年）	・女子 2位	
バドミントン	加藤美幸（体育専門学群4年）	・混合団体 2位 ・女子ダブルス 3位	
	柏原みき（体育専門学群4年）	・混合団体 2位 ・女子ダブルス 3位	
テニス	牛島里咲（体育専門学群3年）	・女子団体 3位 ・女子シングルス 5位	
卒 業 生	バレーボール	兒玉康成（体育専門学群卒業）	・男子 3位
		塚田しおり（体育専門学群卒業）	・女子 2位
	バスケットボール	藤岡麻菜美（体育専門学群卒業）	・女子 2位





世界のトビラ

筑波大学は、海外の教育研究機関と連携し、学生・教職員の受け入れや派遣、交流イベントの開催など、国際的にも「開かれた大学」を目指して、さまざまな活動を展開しています。

世界各地で武者修行

筑波大学は、海外で交流・研究活動をしようとする学生たちを応援しています。各種の海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）の中でも独特なのが、学生が自ら企画立案する活動に対して支援金を支給する「海外武者修行支援プログラム」です。

平成27年度から開始した海外武者修行支援プログラムは、学生の積極性と自立性の向上を図るために設けられた、本学ならではの学生支援事業です。行き先も活動内容も、学生が自分たちで立案するのが最大の特徴。学生が任意のグループを作り、履修している授業や専攻する研究分野にとらわれず、自ら定める目標に向けて活動を計画します。そのために必要な連絡調整や、旅程を組むのも、もちろん現地での行動も、すべて自分たちの力でやるのが原則です。企画をプレゼンした中から、一定の評価を得たものが毎年15件程度採択されます。

プログラム開始以来、44の企画（参加学生数267名）が採択されました。渡航先は、欧米だけでなく、アジアやアフリカなど24カ国にも上ります。今年度は、都市計画やまちづくり、医療や社会保障、スポーツなどをテーマに、各国の取り組みを調査したり、学生同士で意見交換をする、といった企画が世界各地で果敢に展開されています。

約2週間という短期間の活動ですが、プログラムへの応募から帰国後の報告会まで、まさに武者修行。ユニークな体験を経た学生たちの、これからの活躍が大いに期待されます。



システム情報工学研究科博士前期2年の難波洸子さんたち9人は、エストニアへ。電子先進国といわれる国で、どのように市民生活にITが浸透し、まちづくりが変化したのかを調査



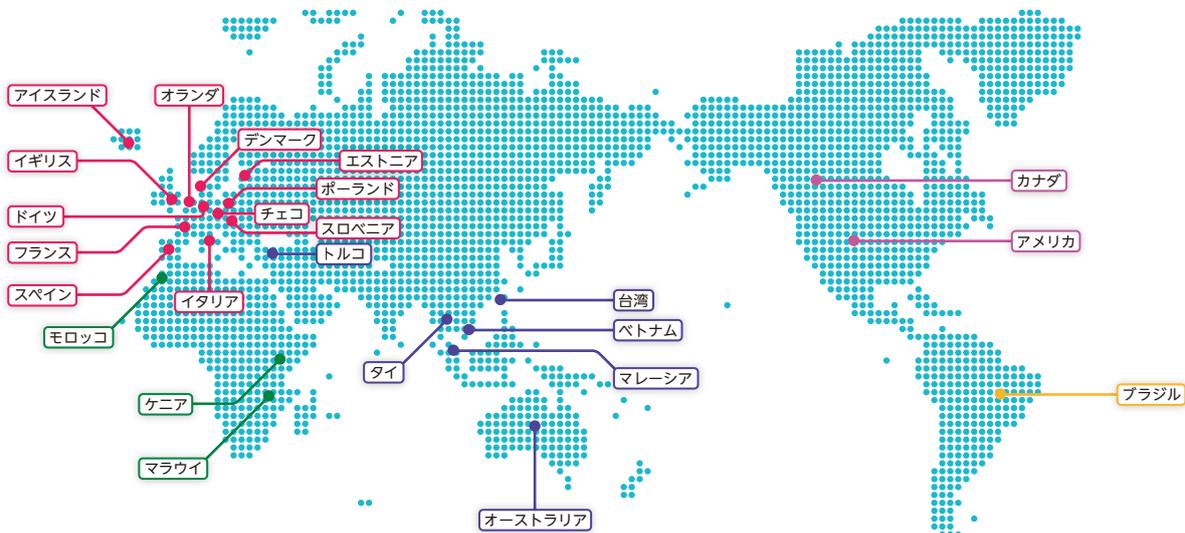
人文・文化学群比較文化学類4年の浅野和花奈さんたち4人は、モロッコへ。観光産業に着目し、交通と宗教と観光の関連などについて調査



平成28年度の武者修行報告会の様子



人間総合科学研究科博士前期2年の大森雄貴さんたち4人は、オランダへ。代表チームの強化を短期間で成し遂げた王立野球協会を訪ね、強さの秘訣を探る



武者修行これまでの渡航先（平成27～29年度）

ツクバで ツナがる

5000人を超す教職員がいる本学。



門戸が開かれた環境

BATON 01

財務部契約課
荻原拓来さん

つくばにきて色々なことを始めました。体育センターのジムで筋トレしたり、学内ループをランニングしたり。さらには同僚とバンドを始め、最近では職員バレーボールにも参加させてもらっています。元来チャレンジ精神の欠片もない自分が、これだけ色々な事に挑戦するのは奇跡ですが、何が転機だったろうと考えると、自分を引っ張ってくれ、挑戦する機会を与えてくれた同僚達がいたからだと感じます。そうした活力に溢れた教職員が多く、誰にでも門戸が開かれているのが本学の良いところではないでしょうか。これぞIMAGINE THE FUTURE.の理念だと思います。

NEXT

今回は、社会人大学院等支援室の高根沢伶奈さんです。「同学年の同期かつ同じ会計職で仲良くしてもらってます。とても魅力的で仕事でもできる大人な女性です」

BATON 05

華道家
海野満峯さん

約30年前のある日、「留学生の中には周囲とコミュニケーションができず、苦労している人も多い」という新聞記事が目にとまりました。自宅で生け花教室を主宰していた私は、学内で留学生やその家族を対象とした生け花のお稽古を開くことを申し出ました。お稽古は今も続いており、卒業生との交流も楽しみの一つです。本部棟のエントランスにもお花を飾るようになって、多くの方に声をかけていただき、お花を活ける喜びをますます感じています。

筑波大学との出会い



筆者 中央

図書館へようこそ

学術情報部情報企画課
峯岸由美さん

BATON 06

NEXT

今回は、教育推進部教授の野村港二さんです。「ライティング支援セミナー等でもいつもお世話になっています。野村先生の溢れ出すアイデア!すごい!」

広報室で「大学概要」の作成に携わっています。H29-30年度の概要は、芸術系木村准教授と芸術専攻の大学院生と一緒に作成しました。今回は、概要の表紙に関するお話をしたいと思います。表紙を見て、「なんだろう?この冊子」と思った方はいますか?まさしく、そう思って手にとってもらえるように、今までにない色使いの表紙が出来上がりました。そして、「ん?黄色?!」と思った方、実はこの黄色はメインの色ではなく、あくまで筑波大学の校章で使われている、つくば紫を目立たせるための補色なのです。表紙のデザインには、担当してくださった木村先生の、筑波大学の固いイメージを「明るい、ポップなものにしたい」という思いが込められています。

黄色!?

BATON 02

広報室
大園裕香さん



木村准教授と筆者(左)

NEXT

今回は、社会人大学院等支援室の五位野光さんです。「最近、親しい共通の友達がいることが発覚し、ぐっと親近感を感じています」



永田恭介学長と筆者(右)

NEXT

今回は、副学長のペントン キャロライン F.さんです。「留学生担当をされているのでお話をさせていただく機会が多いのですが、とても気さくで素敵な女性です」

中央図書館に勤務しています。図書館は勉強したり本を読む場所、というイメージかと思いますが、筑波大学の附属図書館はそれだけじゃないんです。名だたる先生方のプレゼンを飛び入りで体感したり、ヨガや折り紙をしたり、様々な展示(学生さんの活動報告、江戸や明治の版画、現代アート、明時代の磁器等々)を見ることもできます。ぜひお立ち寄りください。みんな大好きがまじゅんばーに会えるかも。写真は、大学院共通科目「ザ・プレゼンテーション」担当の野村先生(右端)とTFの皆さんと。展示やイベントの手助けも私のお仕事です。

リレーメッセージ

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。



諦めず、地道に

BATON

03

医学医療系助教
森祐太郎さん

ロードバイクは自分との戦いです。目の前に大きな上り坂があると辛い、やめたいです。しかし、ペダルを止めてしまつては1mmも前に進みません。諦めない一歩が、確実に自分を前進させます。さて、私は放射線健康リスク科学という分野の教員をしています。原発事故が起こると、直後は救急医療、亜急性期は放射線のリスクコミュニケーション、慢性期は人体影響の疫学研究、時相ごとに求められる知識は全く異なります。手を付けなければならない課題は山積みですが、諦めず、地道に頑張ります。モットーは「Road to カッコイイオトナ」。

NE
XT

今回は、附属病院放射線部の富田哲也さんです。「がん治療の最前線を走りながら博士取得を目指すタフガイ!いつも自分を氣にかけてくれるお兄さんの存在です」

昨年6月、出張で(小さい頃に台湾へ行ったのを除いて)初めての海外へ行きました。行き先は本学と連携協定を結んでいるフランスのポルドー大学です。美味しい食事や右側通行の車、夜中まで沈まない太陽と全てが新鮮だったことを今でも忘れません。私は他大学出身で留学とは無縁でしたが、学生のうちに留学を経験しておけば視野が広がったのかなと思いました。本学は海外の様々な大学と交流協定を締結しており、留学のための奨学金も充実しています。学生さんにはこうしたチャンスを活かして、ぜひ海外へ羽ばたいてもらいたいです。



筆者 右奥

留学のすすめ

BATON

07

教育推進部教育推進課
小泉祐太さん

NE
XT

今回は、医学医療エリア支援室の本村優佳さんです。「スポーツやバンド活動など、いろいろなことにチャレンジされているパワフルな後輩です。また遊びましょう!」

BATON

04

体育芸術エリア支援室
波戸省子さん

このたび機会を得て「ラート」に挑戦しました。「ラート」はドイツ生まれの体操の一種で、日本には筑波大学体育系長谷川聖修教授が留学先のドイツから持ち帰り、普及が始まったそうです。2本の鉄の輪を平行につないだ器具を使用します。輪の中に入り左右にスイングすることから始めて、先生に側についてもらいながら回りました。ぐるーんと回る世界は、まさに『非日常体験』です!「ラート」の競技人口はまだ少ないようですが、つくばでは、体験会が時々開かれていますので、興味のある方はぜひ体験をお勧めします。

ラート体験しませんか



NE
XT

今回は、人文社会系准教授のレスリー・タック川崎さんです。「先日念願のフレンチランチをご一緒しました。中学生を育てるお母さん仲間です」



スポーツからリハビリまで

学内には、四季折々の風景を楽しみながら気持ちよく走れるループ道路やクロスカントリーコース、トレーニング施設があり職員でも気軽にスポーツできる環境があります。気分転換で始めた登山から、今では辛く厳しい山岳レースで苦しみを楽しんでいます。体を虐めたツケなのか、昨年度サッカーで前十字靭帯断裂。再建手術後は、クロカンコースと筋トレルームをフル活用したりリハビリに精進し、7戦目となる日本山岳耐久レース(通称ハセツネ)にも無事復帰しました。日々の修練からリハビリまでも支えてくれるスポーツ環境に感謝です。

総務部人事課
松崎茂紀さん

BATON

08

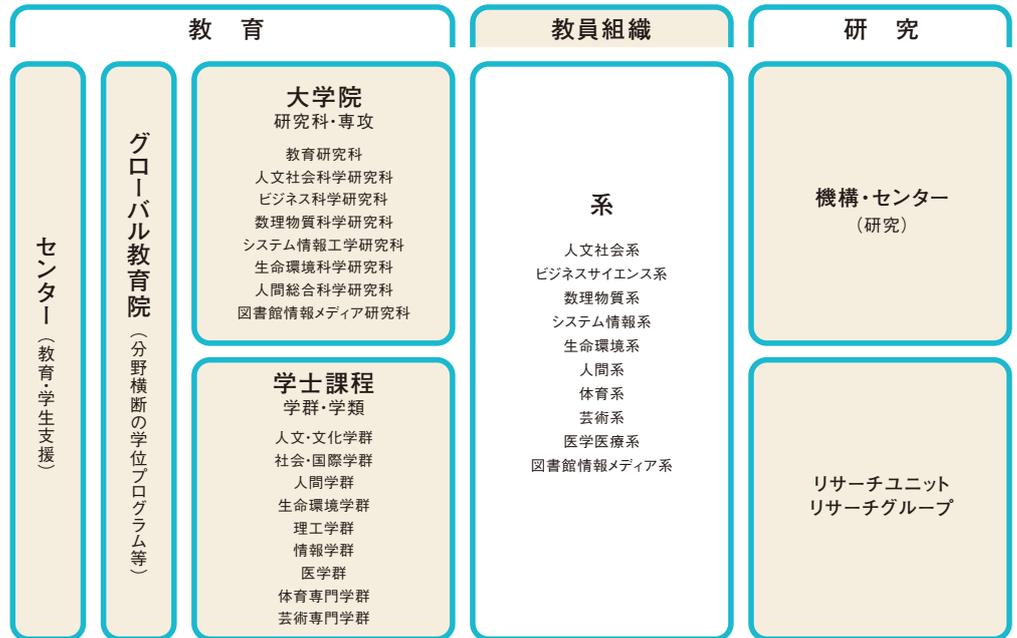
NE
XT

今回は、数理学物質エリア支援室の額賀巳由さんです。「教職員サッカー部の前身「筑蹴会」時代からお世話になり、今も一緒にプレーしている大先輩です」

筑波大学独自の学際融合・領域横断的なシステム

本学は医学・体育・芸術も有する総合大学として、学群・学類等の壁を低くして、学生が専門分野以外にも幅広い教養を身につけることを可能にしています。

また、教員は「系」に所属し、基盤的な研究を行いつつ、学群・学類、研究科・専攻、センター等それぞれの目的に即した教育研究を担います。



2017.7.1現在



筑波大学サテライトオフィスとは？

より幅広く本学を知っていただくために、つくば駅に隣接する複合商業施設「BiViつくば」2階に設置された情報発信拠点です。本学の学生がスタッフとして活動しており、入学案内等の配布の他、教職員や学生によるさまざまなイベントを通じて、社会、地域との交流を行っています。

つくば駅前ゲーム会

11月26日、つくばテーブルゲーム交流会主催のつくば駅前ゲーム会が開催されました。世界各地のテーブルゲームがずらりと並んだ会場では、スタッフの説明を受けながら、世代やバックグラウンドの異なる人々が一緒に、ボードゲームやカードゲームを楽しみました。一見簡単そうに見えるものも、ルールの奥深さに考え込み、真剣になってしまっています。「つい熱中して、気が付いたらあっという間に時間が経っていた」といった声も聞かれました。



マンガ×シェイクスピア×ツクバダイガク

人文社会系の吉原ゆかり准教授による企画で、2018年3月まで、シェイクスピアに関連したワークショップ、講演会、展覧会が随時行われています。11月19日に開催された第3回ワークショップでは、人を惹きつけるのは「驚き」と「興味」の二つの要素だという講義のあと、シェイクスピアの代表作『ロミオとジュリエット』を現代風にアレンジした漫画作品を制作しました。参加者は古典作品を身近に感じながらワークショップに取り組みました。



お問い合わせ

☎ 029-855-2101

✉ bivi-koho@un.tsukuba.ac.jp



つくサテ

筑波大学サテライトオフィスは皆さまのご利用をお待ちしております。

また、Twitterでもイベント情報などをお伝えしています。

🐦 @tsukuba_sat

Events Calendar

1

January

- 13日(土)・大学入試センター試験(～14日)
- 20日(土)・第11回つくば3Eフォーラム会議
「環境変動の現状をあらためて確認する」[つくば市役所]

2

February

- 5日(月)・秋ABCモジュール期末試験
- 9日(金)・秋ABCモジュール期末試験
- 13日(火)・秋ABCモジュール期末試験(～15日)
- 15日(木)・秋学期授業終了
- 16日(金)・期末試験予備日
- 17日(土)・春季休業(～3/31)
- 19日(月)・入学試験「学群英語コース(編入学)」(～3/9)
・2017 BEST FACULTY MEMBER 表彰式
- 25日(日)・入学試験「前期/私費外国人/編入(社会)」(～26日)
- 27日(水)・入学試験「学群英語コース(1年次)」(～3/9)

3

March

- 3日(土)・国立大学法人筑波大学海外教育研究ユニット(人間系)
Kickoff Symposium:The Social Brain
[つくば国際会議場]
- 7日(水)・合格発表「前期/私費外国人/編入(社会)」
- 12日(月)・入学試験「後期」
- 20日(火)・合格発表「後期」
- 22日(木)・平成29年度T-ACT下半年期活動報告会
- 23日(金)・卒業式
・大学院学位記授与式
・合格発表「学群英語コース(1年次、編入学)」
- 27日(火)・春の進学説明会(～29日)[東京キャンパス]
- 31日(土)・学年終了



